



👁️👁️ みどころ

日本の近時の若者向け小説は“純愛モノ”ばかりだが、アメリカの2017年の小説『ささやかな頼み』はなぜ大ヒットし、映画化まで？そもそも、「シンプル・フェイバー」って一体ナニ？

一方はおしゃべりだが地味な女、他方は美人でファッショナブルで知的。すべてに正反対の、そんな2人がなぜ“ママ友”に？まずは“告白ごっこ”から始まる、秘密を共有する快感(?)に注目！

続く『ゴーン・ガール』(14年)と同じような失踪事件の発生からは思わぬサスペンスへ！その後、二転三転、四転五転する物語は如何に？その勝者は？敗者は？

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□■出版前に映画化決定！米国ではそんな人気小説が！■□■

本作の原作になったミステリー小説は、ダシー・ベルの2017年のデビュー作『ささやかな頼み』。全米では『ゴーン・ガール』と比較する評論家も多く、出版前に映画化権が既に販売され、映画脚本家ジェシカ・シャーザーがすぐに脚本の作業に取り掛かったというから、すごい。『チェンジリング』(08年)は9歳の息子の失踪事件(『シネマ22』51頁)を、『ゴーン・ガール』(14年)は愛する妻の失踪事件(『シネマ35』159頁)をテーマにした面白いミステリーだった。

しかして、本作も専業主婦でブロガーのステファニー(アナ・ケンドリック)と、華やかなキャリア・ウーマンのエミリー(ブレイク・ライブラー)という対照的な2人のヒロインを主人公とする、一見“ママ友”同士の風景を描くコメディと思わせながら、実はエ

ミリーの失踪事件を巡って二転三転するミステリーだ。そのキーワードは“消せない秘密”。ちなみに、本作は原題も『A Simple Favor』だが、Favor（フェイバー）とは①好意、親切、②親切的な行為、願い、のこと。しかして、このタイトルの意味は・・・？

■なぜすべてに正反対の2人が“ママ友”に？■

冒頭、ニューヨークの郊外に住み、育児や料理についてのブログを運営しているシングルマザー、ステファニーの姿が登場する。ステファニーを演じたアナ・ケンドリックは『マイレージ、マイライフ』（09年）（『シネマ 24』34頁）や『ザ・コンサルタント』（16年）で何度も見ている女優で、早口でよくしゃべる印象が強いが、本作ではそれが最初から全開で全編を通じて顕著だから、それに注目！彼女がシングルマザーになったのは、夫が車を激突させる事故で死亡したため。その時、助手席に乗っていた義理の兄も一緒に失ったというから、彼女の心の痛みはいかばかり……。もっとも、その時の生命保険金でささやかな現在の生活が成り立っているそうだから、やはり生命保険は大切だ。

ブログ運営や一人息子の送り迎え等、生活感いっぱいステファニーに対して、ステファニーと同じく一人息子を持っても、常にファッショナブルな服装で、大きなお屋敷に住んでいるエミリーの方は、生活感ゼロで、当代のキャリアウーマンぶりがキラキラしている。従って、息子同士が同じ学校に通っていても、ステファニーとエミリーは所詮、水と油のように対照的だから、合うはずはなし。そう思っていたが、ある日「マティーニを飲みに家に寄らない？」と誘われたステファニーがエミリーのお屋敷を訪問したところから2人は急接近することに。しかし、性格もファッションも、そして経済面でも全く正反対のこの2人が、なぜママ友に・・・？

■“告白ごっこ”の生々しさに唖然！その勝者は？■

帰ってきた夫ショーン（ヘンリー・ゴールディング）とのアツアツぶりを見せつけられたせいもあって、ステファニーは、ある日、お互いの秘密を暴露しあう“告白ごっこ（合戦）”で、義理の兄との間に起きたとんでもない話を告白！これは、エミリーが「3Pを楽しんだことがある」とコトもなげに秘密を打ち明けたことへの“対抗”らしい。

しかして、その告白は、夫が義理の兄を助手席に乗せたまま車を激突させる事故を起こすきっかけになったのは、何とステファニーが義理の兄とデキてしまったため、というから恐れ入る。しかし、ステファニーはなぜそんなとんでもない秘密をエミリーに告白したの？それは、2人だけの秘密を共有し合うことによって、その2人は特別な関係（親友）になれるという考え方（思い込み？）に基づくものだ。ステファニーはまず自分からそんな重大な秘密を告白することによって、エミリーに対して、「是非親友になりましょう」というエールを送ったわけだが、さあ、それに対するエミリーの方は・・・？

ブログ運営者としてカメラの前で料理の解説をしているステファニーは無邪気

そのものだし、エミリーの息子の送り迎えやその子守を嫌がらずにこなしているステファニーはむしろそれが楽しそう。しかし、この“告白ごっこ”でのステファニーの告白を聞くと、実はステファニーはかなりの魔性の女！？すると、誰がどうみても魔性の女にしか見えないエミリーの方は、表面ヅラはハンサムな夫ショーンとアツアツぶりを見せつけているものの、そのウラでは一体何をしているかわかったものではない。こちらも、きっとかなりの魔性の女だ。したがって、「私の写真を撮るのは絶対ダメ！」「この家は借金だらけで大変！」等々と語っていたエミリーの方にこそたくさんの秘密がありそうだが、今日はステファニーの告白だけで満腹！そのため、エミリーのそれ以上の“告白”は“お預け”にされたから、この告白合戦の勝者はエミリー。しかして、これ以降“ママ友”としてのステファニーとエミリーの力関係は、どう見てもエミリーの方が優位に・・・？

■女ジェンダーをどう考える？突然エミリーが失踪！■

本作のパンフレットには斎藤綾子氏（作家）の「ステファニーとエミリー、それぞれが放つ女性というジェンダーの魅力」と題する REVIEW があり、そこでは同性としてのかなり突っ込んだ“解説”がされている。そして、そこには「正直に言ってエミリーの誘惑よりも、罪深さを感じている分、ステファニーから進るエロスの方が濃厚だ。彼女の、必要とされることを必要とする体質が、何よりも女性的でエロティックだと私は思う。」と書かれている。“告白ごっこ”で話されるエミリーの告白を聞けば（見れば）、この解説の意味シンさがよくわかるが、男の私がそんなジェンダーの奥深さを理解するためには、この REVIEW は必読だ。

あの日の“告白ごっこ”以降、ステファニーはいつもエミリーの息子の子守役や送り迎え役をやらされるようになり、周りからは「奴隷のよう」「シッターのよう」と言われていたが、当のステファニーはエミリーの魅力もあって、そんな役回りがまんざらでもなさそう。しかし、ある日子供を預かったまま、エミリーが迎えに来ないことになると・・・？さらに、それから何日も連絡がとれない事態になると・・・？

■そこまでやるか！？この女の魔性ぶりにビックリ！■

エミリーが急に失踪してしまったことに困惑したステファニーは、ショーンと相談し警察にも届け出たが、その他にも、ブログで情報を募ったり、エミリーの会社を訪問したりと懸命な努力を続けた。もちろん、これはエミリーの子供の世話を続けなければならない等々の困惑に伴う行動だが、スクリーン上ではどこかでそれを楽しんでいるように思えるのは、私の偏見・・・？ちなみに、ステファニーが一度エミリーが働いている人気のアパレル会社を訪問してみると、上司のデニス（ルパート・フレンド）は全くエミリーに無関心なようだから、アレレ・・・？彼はなぜ親身になってエミリーの行方を捜そうとしない

の？これって逆に何か怪しいのでは？

ステファニーはそんな無関心なデニスに代わって勝手にエミリーの部屋に入り込み、失踪に関する何らかの情報がなければ調べはじめたが、おいおい、そこまでやるか！？それはともかく、その調査の結果、あれほど撮られることを嫌がっていたエミリーの写真をデスクの中に発見。そこには、謎のメッセージも……。ステファニーのブログがどこまで拡散しているのかは知らないが、ある日、そのブログにある情報が舞い込んできたうえ、ミシガンの湖でエミリーの溺死体が発見されたという何とも悲惨な情報が。その死体には、ステファニーが見せてもらったエミリーのタトゥーがあり、その指にはエミリーが母親から譲ってもらった（盗んだ？）という高価な指輪も付いていたというから、こりゃエミリーに間違いなし！？また、死体からはヘロインを使用していた痕跡も？ひょっとして、エミリーは酒だけではなくヘロインにも手を出していたの？

■□■保険金目当ての殺人？松本清張のサスペンス調に？■□■

そんなこんな疑惑が広がる中で落ち込んでしまったショーンを見かねたステファニーは、エミリーの子供の世話のみならず、ショーンのおもい（？）もしていたが、いつの間にか2人の間には怪しげな男女の感情が……。ええ、まさか？そう思っていると、ある日ついに2人は……。！シングルマザーとして健気に生きているステファニー。本作導入部ではそうとしか思えなかったが、この女がここまで魔性の女だったとは！

他方、エミリー亡き後（？）、今やショーンと夫婦同然に暮らしているステファニーの耳に、ある日警察から、エミリーには400万ドルの保険がかけられていたとの情報が入ったからビックリ。そうすると、ひょっとしてエミリーの失踪・死亡は、夫の死亡による保険金で今の生計を立てているという話をエミリーを通じてステファニーから聞いたことによるショーンの悪巧み？もちろん、ショーンはそれを即座に否定したが、こうなると俄然、松本清張の名作『疑惑』（82年）『シネマ10』33頁）と同じような、保険金目当ての殺人事件の疑惑も……。？

■□■二転三転！四転五転！勝者は？敗者は？■□■

映画評論を書き始めた時に、『イングリッシュ・ペイシエント』（96年）『シネマ1』2頁）と並んで、すぐに書き始めたのが『ワイルドシングス』（98年）『シネマ1』3頁）ここでは、「これは、もう絶対おすすめ。5転・6転のストーリーが読めれば天才。」と書いた。同作は、最初に見せられた「レイプ事件」について、何かヘンだなと思わせながら、どんどん怪しげな展開になっていったが、その中で2転、3転、4転ではなく、5転、6転……の展開になり、ラストにタネ明かしの映像が流れてきて、事実の流れを再確認して納得。そんな映画だった。

それに比べると、本作が松本清張の『疑惑』のようなサスペンス調になるのは中盤から

だが、そこからエミリーの双子（三つ子？）の妹が登場したり、死んだはずのエミリーが再び登場したり、と二転、三転しながら、さらに四転、五転していくから、そのミステリーとサスペンスに注目！ひょっとして、これは失踪したエミリーが仕組んだ巧妙なワナ？本作を観ている人なら誰でもそう思うてしまうし、確かにそんな要素も大だが、そこに意外にしぶとく喰らいついていくのがステファニー。この女は、あの魔性ぶりだけでもビックリさせられたのに、更にこんなにタフで利口だったの？

本作後半以降は、そんな怒濤の展開とそれに奇妙にマッチしたステファニーの超早口のしゃべりに注目！しかして、最後の勝者は？敗者は？

2019（平成31）年3月15日記